

## 4. 豪雨災害

### 4.1 宮崎県に被害を与えた台風・豪雨

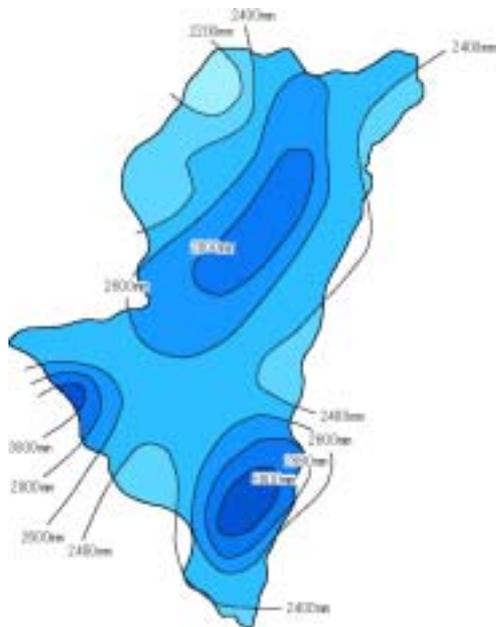


図 4.1 本県の年降水量分布図  
(宮崎地方気象台データを基に作成)

本県は、県全域で年間に 2000mm 以上の雨が降ります。全国平均値の 1718mm(1971～2000 年の平均値)と比べても雨が多いことがわかりますが、特に霧島山系・鰐塚山系では 3000mm を超え、四国の太平洋岸、紀伊半島の東部とともに日本の最多雨地帯となっています。

霧島山系のえびの高原は、年降水量の平均値が 4804mm で、高知県上魚梁瀬の 4831mm に次いでいます。なかでもえびの高原での 6～7 月の合計降水量の平均値は 1650mm で全国第一位となっています。



図 4.2 本県が大被害を受けた台風  
(宮崎地方気象台データを基に作成)

本県は、地理的位置から台風の通過経路となりやすいために昔から「台風銀座」と呼ばれてきました。本県を襲った台風は戦後だけでも、昭和 20(1945)年の枕崎台風(県内死者 76 名：以下同)、昭和 25(1950)年のキジア台風(9 名)、昭和 26(1951)年のルース台風(48 名)、昭和 29(1954)年の台風 12 号(67 名)と枚挙にいとまがありません。

このほかにも、6～7 月の梅雨前線上を低気圧が東進する際の大雨や、熱帯性低気圧が停滞して、梅雨前線に刺激をもたらす大雨などにより、毎年多くの人命や財産が失われてきました。

宮崎地方気象台によれば、一連続雨降水量が 300mm 以上のうちの 44% が梅雨期に観測され、次いで台風(熱帯低気圧を含む)が 30%、秋雨前線が 20% となっています。秋期に台風と秋雨前線が重なりあった場合、大災害 - 例えば昭和 29(1954)年災 - となることがあります。また、県東部は湿った東風によって雨が降りやすく、台風が九州の遙か南にある時でも、その間接的な影響で短時間の集中豪雨が発生することもあります。

表 4.1 本県に被害を与えた台風・豪雨

No.	西暦	和暦	被害状況
2	1642.9.3	寛永十九年八月九日	大雨、西都市三納山の井上で、山崩れが発生して河道が閉塞されました。決壊後は出水の度に小石が流れ出て、川岸の田畑がみな河原になったと『佐土原藩騒動記』に記されています。
4	1721. 7.26～31	享保六年 閏七月三日～八日	大雨、山間部に堆積していた享保初期の火山噴出物が土石流となり、高原郷から高崎、高岡、野尻郷一帯を襲い、多数の死者が出ました。
6	1762.9.25	宝暦十二年八月八日	暴風雨、高鍋藩城下で山崩れが発生して死者4名が出ました。
8	1769.8.31	明和六年八月一日	七月二十八日に発生した地震と、八月一日の風雨で北方町曾木では山崩れが発生して死者1名が出ました。
9	1778. 8.1～3	安永七年 七月九日～十一日	暴風雨、串間御手炭山が崩壊して死者6名が出ました。
10	1779.9.2	安永八年七月二十二日	暴風雨、串間市都井で山崩れが発生して死者2名が出ました。
11	1825.9.25	文政八年八月十三日	風雨、日南市鶴戸山の本坊三社権現の後ろで山崩れが発生しました。仁王門はそのまま14、5間海へずり出し、大光坊は地下に埋まりました。
13	1850.11.3	嘉永三年九月二十九日	大雨、高原町蒲牟田上迫で土砂崩壊が発生して4名以上の死者が出ました。
15	1854.6	嘉永七年五月	大雨、高原町蒲牟田上迫で再度土砂崩壊が発生しました。嘉永三年の時より広範囲に崩壊したため、転居者が続出しました。
17	1887	明治20年10月21日	局地的雷雨、平野村字東光寺(現日南市吾田町)で山崩れが発生して、家屋1戸が埋没し死者6名が出ました。
20	1909	明治42年8月1～2日	暴風雨、東郷町瀬平で人家に被害が出て田畑が埋没しました。都農町川北では立野用水池・西の郡用水池堤防が決壊して死者5名が出ました。
22	1919	大正8年8月	暴風雨、高岡町浜子で地すべりが発生して死者4名が出ました。
24	1925	大正14年9月4日	大雨、日之影町で崖崩れ発生して死者2名が出ました。
26	1938	昭和13年10月14～15日	台風、串間市都井・本城・市木では、山崩れ・土石流による被害激甚、農地全滅。翌14年からの復旧工事は、馬車道しかなく困難を極めました。
27	1939	昭和14年10月16日	台風、清武川流域で土砂流が発生して死者32名の大きな被害が出ました。
29	1942	昭和17年6月22～23日	梅雨前線、小林市真方の急傾斜地で崖崩れが発生して、死者8名が出ました。
32	1945	昭和20年9月17日	枕崎台風、えびの市求清水流谷で土砂流が発生して、進駐兵2名が土砂で圧死しました。
33	1949	昭和24年6月20日	デラ台風、日之影町西日之影の七折村農協前で崖崩れが発生して、死者8名、家屋全壊8戸等の大きな被害が出ました。
34	1950	昭和25年9月13日	キジア台風、南郷村で山崩れが発生しました。五ヶ瀬町室野で山崩れが発生して、家屋倒壊1戸、死者1名が出ました。
35	1951	昭和26年7月5～8日	誘因不明・梅雨前線、南郷町大島竹の尻で5日～7日にかけて幅400mの地すべりが発生しました。7日夜には200mmの豪雨により、範囲がさらに10m拡大して家屋倒壊5戸、半壊5戸などの被害が出ました。
37	1954	昭和29年7月14日	梅雨前線、串間市本城町の高畑山基地工場飯場が崩れて就寝中の17名が生き埋めとなり、内6名が死亡しました。
38		昭和29年8月16～18日	台風5号、高千穂町向山鶴の平で家屋5戸が原野崩壊のため埋没して、死者3名、行方不明者1名が出ました。椎葉村では耳川上流の椎葉発電所工事に従事中の土工飯場が、山崩れのため損壊・埋没して、死者5名、行方不明者12名の被害が出ました。
39	1954	昭和29年9月11～13日	台風12号、椎葉の河川上流地帯各所で地すべりが発生して、河道が閉塞されました。決壊後、大山津波発生して大河内本郷地区・吐野地区で死者17名が出ました。五ヶ瀬町三ヶ所一ノ瀬で山崩れが発生して、死者1名が出ました。高千穂町岩戸、登尾で山崩れが発生したため、上村堤防が崩壊して溺死者11名、行方不明者4名が出ました。南郷村では死者3名が出ました。西郷村では山崩れが発生して、死者3名が出ました。諸塚村では崖崩れが発生して、死者4名が出ました。
42	1957	昭和32年 6月30日～7月6日	梅雨前線、綾町の民家裏で高さ30m、幅20mが崩れ、死者1名が出ました。
44	1961	昭和36年9月15～17日	第2室戸台風、五ヶ瀬川沿岸部落で土砂崩れが発生して、死者6名が出ました。

(番号は表12・図1.6に対応)

No.	西暦	和暦	被害状況
45	1961	昭和36年11月20～21日	温暖前線。国道日南線の掘切峠南方で大規模崩壊が発生しました。標高120mの山が9合目付近から幅250mにわたり海岸線になだれ落ちました。
49	1965	昭和40年7月3日	梅雨前線。えびの市真幸字内堅の肥薩線真幸駅西側約2kmの山腹から、白川(川内川支流)に沿って黄土(風化シルト)が大量に流れ出し、真幸黄土工場の建物4棟合計99m <sup>2</sup> が押し流されました。その後の小流失あわせて計25,000m <sup>3</sup> の土砂が流失し、田畑80aが埋没しました。
50	1966	昭和41年8月14～15日	山之口町の境川で鉄砲水が発生して、青井岳にキャンプ中の青島中学校の教師1名と生徒8名が死亡しました。北川町下塚では裏山の50m中腹から崩壊が発生して避難所が埋没し死者15名が出ました。
52	1969	昭和44年6月30日	梅雨前線。三股町勝岡の町道勝岡夢池線のシラス法面が崩壊して女子中学生4名が死亡しました。
53		昭和44年7月11日	梅雨前線。日南市飢肥山ヶ迫で崖崩れが発生して、死者1名が出ました。
56	1971	昭和46年8月29～30日	台風23号。日之影町見立奥村で山崩れが発生して一家5名が死亡しました。五ヶ瀬町三ヶ所では病院裏山が崩壊し、死者6名が出ました。
57	1972	昭和47年7月6日	梅雨前線。えびの市真幸字内堅の肥薩線真幸駅の裏山(海拔500～600m)が8合目付近から崩れ、家屋27戸を押し出す山津波が発生しました。山津波は6日14時15分から5回に分かれて発生し、高さ350m×幅280mにわたって斜面が崩壊しました。30万m <sup>3</sup> に及び土砂が肥薩線を切断し、白川沿いに1.5kmにわたり流失しました。死者4名、負傷者5名の人的被害のほか、住家28棟、非住家29棟を流失しました。
63	1979	昭和54年10月18日	台風20号。高岡町上倉永で崖崩れが発生して死者1名が出ました。
64	1982	昭和57年7月24～25日	梅雨前線。椎葉村倉ノ迫で崖崩れが発生して死者2名が出ました。同村不土野右支川で100万m <sup>3</sup> の大崩壊が発生しました。
65	1982	昭和57年8月13日	台風11号。西都市讓葉で大規模崩壊(崩壊土砂約300万m <sup>3</sup> )が発生して、一時ノ瀬川の河道を閉塞しました。同市穂北と中尾で山崩れが発生して、死者が各1名出ました。日之影町で山崩れが発生して、宮水地区2名、平清水地区で1名の死者が出ました。
77	1993	平成5年7月31日～8月2日	大雨。高崎町大牟田字切藤で幅40m、高さ30m以上、幅108m、高さ30m以上の斜面崩壊が2ヶ所で発生して、死者1名が出ました。高千穂町河内字栃屋で幅31m、高さ29mの斜面崩壊が発生して、死者1名が出ました。
78		平成5年8月10日	台風7号。北方町子後曾木で幅28m、高さ24mの斜面崩壊が発生して、死者1名が出ました。
79		平成5年9月3日	台風13号。小林市細野大王・豊原地区で土石流が発生して、1名が死亡しました。高千穂町では斜面崩壊によって家屋が損壊しました。日之影町では根原川で土石流が発生しました。
81	1999	平成11年8月2日	台風7号。高千穂町で農地法面が崩壊して、死者1名が出ました。
82	2003	平成15年8月8日	台風10号。日之影町大人で崩壊が発生して、家屋1戸が全壊しました。
83	2004	平成16年8月28～30日	台風16号。椎葉村各所で崩壊が発生して、一時村は孤立状態となりました。日之影町西日之影で崖崩れが発生して、家屋1戸が半壊しました。
84		平成16年9月4～7日	台風18号。椎葉村で土砂崩壊が発生して、迂回路が途絶されたため、再度村は孤立状態となりました。西米良村や高岡町では土石流や崖崩れが発生し、人家の一部破損を含む半壊3戸などの住宅被害が出ました。
85		平成16年10月20日	台風23号。北川町長井で土砂崩れが発生して国道10号線が幅約30m埋没しました。日南市富士の市道(旧国道220号線)脇の斜面で地すべりが発生して、道路約200mにわたって海岸護岸もろとも決壊しました。延岡市では23箇所では崖崩れが発生して、人家に被害が出ました。
86	2005	平成17年9月4～6日	台風14号。県内139箇所土砂災害(土石流49箇所、崖崩れ73箇所、地すべり17箇所)が発生しました。このうち椎葉村、高千穂町、三股町、山之口町での土砂災害で11名が亡くなりました。塚原ダム下流(耳川)で一時的に河道が閉塞されました。宮崎県では13市町村に災害救助法を適用しました。

#### 4.2 三納山の天然ダム災害 寛永十九年八月九日(1642.9.3) <事例 No.2>

『佐土原藩騒動記』によれば、「日州佐土原領三納山井土ト云所アリ、此井中ニ先年ヨリ人ノ居屋敷アリ、寛永十九年八月九日彼井戸ノ東ニ向タル山ノ片平横何百間共シレズ尾筋引ハリ、其片平ノ山岡ハ岡、谷ハ谷其儘直ニ井戸ノ河内へ崩落チ、大川ヲ土ニ小石ニテ突埋メケリ、然ルニ其時大雨ナリ、里川ニ水ナク成タル故里人ハ山崩レタルハシラズ、此大雨ニ川ニ水ナキハ何事ヤラント驚キ、何レ不思議ト沙汰スル所ニ、大木小木山ノ如ク里川江流出ルヲ見テ扱ハ山崩シツラント人々始テ安堵シタリケリ、扱川端ノ田畑石ニテ埋メ河原ニナル、井戸ヨリ下川内大石計ニテ人ノ通路ナシ、仍テ細石ヲ以テウメ黒川ノ如クニ為ス、夫ヨリ以来水増出ル度毎ニ小石流レ出テ川端ノ田畑皆河原ニナル、三納一在所ノ痛ミナリ」と記されています。

この歴史史料から、現在の西都市三納で山崩れが発生し、崩れ落ちた土砂が河川を閉塞したことがわかります。そして湛水は決壊しましたが、溜まった水や土砂は、決壊した後も、雨が降る度に流出し、田畑に大きな被害を与えたことが読み取れます。(※『佐土原藩騒動記』の「井土ト云所アリ」の「井土」及び『佐土原藩譜』の「井戸ト曰フ在」の「井戸」は、字切図を見ると「井上」の誤記である可能性があります)

我カ江郎ニ由ス八月九日三納山崩ル我カ領内  
西ノ方ニ三納郷アリ末良山脉ノ麓下ナリ其側  
早ク井戸ト曰フ在昔ハ居屋敷也ト傳フ此所末  
面ノ嶺腹自ラ兩裂又其幾岡ナリ知ラス山ノ  
尾筋ヨリ一本面ヲ陥没レ直ニ落テ河中ニ入土  
ト石礫トヲ埋メ大河為メニ堵塞ス該日強雨頻  
リナリ川下ノ里人流水ノ俄カニ絶涸スルヲ見  
甚々怪レモ此ノ強雨河水流レス此レ何等ノ兆

出典：『佐土原藩譜』

(この時の災害記録が記されています)

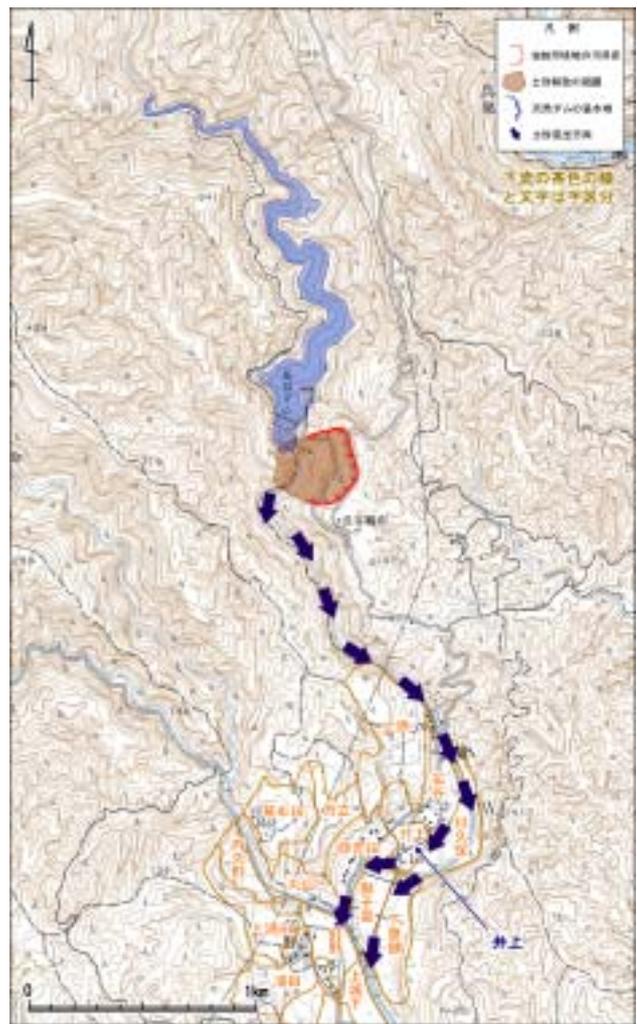


図 4.3 三納の山崩れによる災害状況図  
(国土地理院 1/25000 地形図「三納」)

### 4.3 享保の大土石流 享保六年閏七月三日～八日(1721.7.26～31) <事例 No.4>

宮崎県と鹿児島県の県境に位置する霧島山新燃岳では、享保元(1716)年から享保二(1717)年にかけて、現在の主要地方道小林～えびの高原牧園線に達するような火砕流を流出する比較的規模の大きな噴火が発生していて、東麓に大量の火山灰を降らせていました(3.火山災害 p.28 参照)。

新鮮な火砕流・火山灰が堆積しているところに、享保六(1721)年閏七月三日～八日にかけて、諸県郡を昼夜間断なく豪雨が襲いました。この大雨で大洪水が発生して、山間部に堆積していた享保初期の火山噴出物が土石流となり下流の集落を襲いました。この災害で、高原郷から高崎郷、高岡郷、野尻郷一帯にかけて多数の死者が出ました。

享保年間の霧島山噴火以降、諸県郡では農業や社会生活を営む環境が著しく悪化することになりました。このような環境の激変によって、諸県郡は人が住むにしても、集落を発展させるにしても、また他所から人が新たに入植して定住していくにしても、噴火の前に比べるとはるかに暮らしにくく、人を惹きつけるものが大きく減退した風土や自然環境になってしまったことが推測されます。17世紀末から18世紀前期にかけて増加傾向にあった諸県郡の人口が、享保年間からまもなくして大きく落ち込み、明治時代に至るまで7万人台の人口に停滞するようになった背景には、享保初期に起こった霧島山の噴火活動が残した後遺症によるところも大きかったものと思われます(宮崎県,2000b)。



図 4.4 享保初期の火山災害と享保六年の土石流災害状況図  
(国土地理院 1/200000 地勢図「八代」・「延岡」・「鹿児島」・「宮崎」)

#### 4.4 台風による貯水池決壊 明治42(1909)年8月1~2日 <事例No.20-1・No.20-2>

台風は明治42(1909)年7月29日に、フィリピンの北東海上に現われ、北東方向に進行して31日夜、屋久島付近に到達しました。その後、進路を北西に転向して、8月1日に南九州をかすめて大雨を降らせました(宮崎地方気象台,1967)。

三田井 537mm  
 三ヶ所 493mm  
 田代 436mm  
 西米良 410mm  
 神門 377mm  
 (宮崎地方気象台,1967)

県内で死者9名、家屋流失・全壊61戸、埋没7戸、浸水1400余戸などの被害のほか、農作物に大きな損害が出ました(宮崎地方気象台,1967)。

県下では、各河川が氾濫して近年稀な洪水となりました(宮崎地方気象台,1967)。

東郷町瀬平では、山崩れが発生して、家屋が損壊して田畑が埋没しました(東郷町,1999)。また、都農町では立野用水池・西の郡用水池の堤防が決壊して上町、北町、の家屋が流失し、死者5名の犠牲者が出ました(都農町,1998)。



写真 4.1 現在の立野用水池(2004年撮影)

現在の地元住民の方々に、この明治時代の災害について詳しく知る人はいないようですが、このような過去の事実を記録にとどめておくことは今後の防災においてとても大切なことです。



図 4.5 用水池決壊と土石流災害状況図(国土地理院1/50000地形図「都農」)

### 4.5 清武川大洪水 昭和 14(1939)年 10 月 16 日 <事例 No.27>

台風は昭和 14(1939)年 10 月 16 日 6 時、那覇の西方約 110km を 960hPa で通過した後、同日 18 時に屋久島北方を経て、21 時頃に宮崎県南方海上に至りました。その後、東北東に進み夜半に四国沖を通過して八丈島南東海上に去りました(宮崎地方気象台,1967)。

宮崎 657mm  
 高鍋 452mm  
 田野 430mm  
 内海 417mm  
 星倉・北河内・有水・  
 都城・川南・都農・  
 細島 300mm 以上  
 (宮崎地方気象台,1967)

県内で死者 53 名、行方不明者 13 名、住家全壊 253 戸、半壊 415 戸、流失 90 戸、床上浸水 2751 戸、橋梁流失 46 ヶ所、堤防決壊 76 ヶ所などの大きな被害が出ました(宮崎地方気象台,1967)。

昭和 13(1938)年 10 月 14~15 日、県南部に台風が襲来して、県内で死者・行方不明者 13 名、家屋全半壊 113 戸の大きな被害が出ました(県土木部砂防課,1981)。

昭和 14(1939)年、再び台風が県南部を襲いました。10 月 15 日より雨が降り始め、16 日は記録的な豪雨となりました。雨量は大淀川水系で多く観測され、下流の宮崎観測所では 15~16 日の降水量が 657mm を記録しました。この時、県北部五ヶ瀬川上流域は 100mm 以下の降水量でしたので、県南部に雨が集中的に降ったことが分かります。

県下の被害は宮崎市、宮崎郡で最も多く、特に清武川流域(田野町・清武町等)では土砂流が発生して堤防が決壊したために、家屋が流失して溺死者 32 名を出すとともに、田畑の埋没・流失が 100 余町歩(約 100ha)に達する大災害が発生しました(宮崎地方気象台,1967)。

これらの災害や、昭和 18(1943)年の大淀川、大瀬川の大洪水による災害を契機に、昭和 22(1947)年に県土木部に「砂防課」が新設されました。



写真 4.2 流失破壊された日豊線 (清武町教育委員会所蔵)



写真 4.3 谷口呉服店付近の惨状 (清武町教育委員会所蔵)

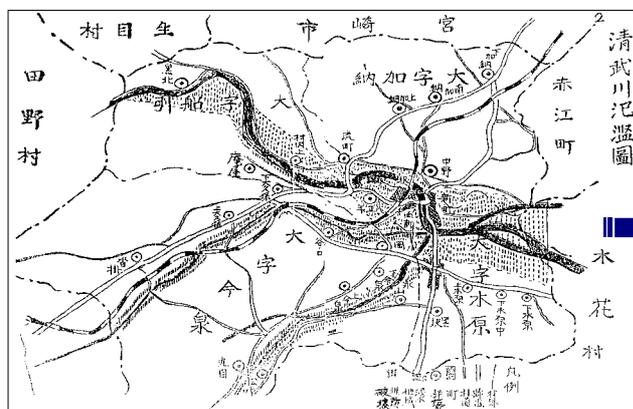


図 4.6 清武川氾濫図(「清武町の昭和」集編集委員会, 1996)



図 4.7 清武川氾濫図(図 4.6)の位置図 (国土地理院 1/200000 地勢図「宮崎」)

#### 4.6 台風12号による豪雨災害 昭和29(1954)年9月11~13日 <No.39-1~No.39-8>

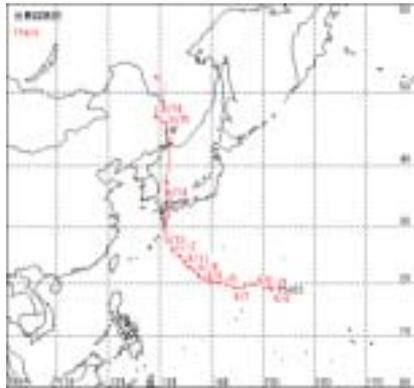
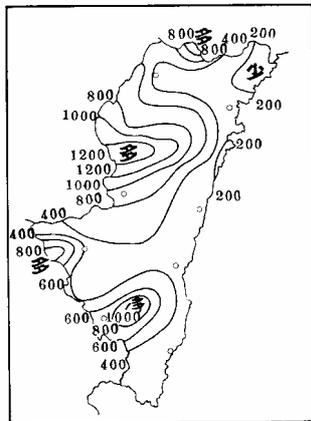


図 4.8 台風12号経路図  
(気象庁ウェブサイト)

マリアナ諸島東方洋上にあった弱い熱帯低気圧が昭和29(1954)年9月5日9時に台風に発達しました。13日正午頃に屋久島西方を通過して15時頃、鹿児島県枕崎市の東方に推定956hPaで上陸しました。台風はその後、北あるいは北北東に進んで九州を縦断したため、宮崎県では大雨となりました(宮崎地方気象台,1967)。

県内で死者51名、行方不明者13名、家屋全壊350戸、流失264戸、半壊683戸、一部破損5906戸、床上浸水8228戸、堤防決壊311ヶ所、橋梁流失148ヶ所、山(崖)崩れによる道路埋没824ヶ所、鉄道埋没911ヶ所、田畑流失・埋没・冠水約13,700町歩(約1万3700ha)などの甚大な被害が出ました(宮崎地方気象台,1967)。



見立 978mm 神門 913mm  
 蝦野 851mm 家代 713mm  
 三ヶ所・下福良・坪谷・村所・  
 銀鏡・都城 600mm以上  
 (宮崎地方気象台,1967)

図 4.9 宮崎県降水量分布図  
(単位: mm, 9月10~13日)  
(宮崎地方気象台, 1967)



写真 4.4 流失直前の五ヶ瀬橋  
(日之影町,2001 田邊晶昭氏提供)

表 4.2 台風12号による宮崎県内の土砂災害

地点 No.	市町村	被害概要
39-1	椎葉村	村内を流れる河川(耳川・一ツ瀬川等)の上流地帯各所で地すべりが発生して河道が閉塞されました。土砂により閉塞された河川は短時間で満水となり、一挙に決壊して、大山津波となって流下したため、村内各所に甚大な被害を与えました。特に被害が大きかったのは大字大河内の本郷地区と吐野地区でした。この2地区だけで、死者17名、流失家屋24戸、流失田畑28haに達し、農地は再び耕地に復旧できない砂と岩石の堆積する川原となりました。
39-2	五ヶ瀬町	三ヶ所一ノ瀬で山崩れが発生して1名が死亡しました。このほか、村内では家屋5戸が倒壊・流失して、死者7名の犠牲者が出ました。
39-3	高千穂町	岩戸・登尾地区で山崩れが発生して上村堤防が崩壊したため、溺死者11名、行方不明者4名の犠牲者が出ました。
39-4	南郷村	山肌が裂け土砂が流出して上渡川が閉塞されました。榎葉谷が全滅し、田出原、五色谷、門田、松塚谷、木浦谷の各谷からも土砂が流出しました。岩石により大川が氾濫し、死者3名、流失家屋19戸、田畑被害20町歩(約20ha)の被害が出ました。
39-5	西郷村	山崩れが発生して、死者3名が出ました。
39-6	諸塚村	崖崩れが発生して、死者4名が出ました。
39-7	東郷町	東郷町越表字中水流では土石流が発生して家屋2戸が全壊したため、8世帯が転居しました。

(番号は表1.2・図1.6に対応)

椎葉村大河内本郷の椎葉重行さんのお宅では、この災害当時、被災した地域住民の約 100 人が、避難生活を送っていたそうです。椎葉さんの当時の日記が残っていたので、その一部をご紹介します。

昭和 29 年に、大風が来て、大河内の村が大雨により家が 15 戸ぐらい流れた。人も 12 人ぐらい亡くなったのです。大河内小学校は、谷ノ口の峠から山崩れで押し流された。家に集まったのは 100 人近かったでしょう。大きな釜で飯を炊いて食べた。



写真 4.5 椎葉村大河内尾崎の被害  
(椎葉村所蔵)



写真 4.6 南郷村樫葉の被害  
(楠 光氏所蔵)



図 4.10 台風 12 号・台風 14 号による  
大淀川上流域氾濫状況図  
(都城市史編纂委員会, 1997 を基に作成,  
国土地理院 1/200000 地勢図「宮崎」「鹿児島」)

都城盆地では昭和 29(1954)年 9 月の大雨時(台風 12 号, 台風 14 号)の降雨が、観音瀬に建設された轟ダムによって下流に排出できず、高城町、高崎町、都城市で大洪水が発生しました。このため、盆地に大きな湖が出現しました。この洪水で耕地 3500ha が浸水し、収穫ゼロの水稻は 320ha にも及ぶなど農作物は壊滅的な被害を受けました(都城市史編纂委員会, 1997)。

この災害を機に、太郎坊町池島地区の 34 戸(他 2 戸)が集団移住しました。そして盆地の農民の間では、再びダム撤去運動が起こり、轟ダムは昭和 36(1961)年に九州電力によって撤去されました。代替として下流 3.7km 地点に現在の大淀川第一ダムが建設されました(都城市史編纂委員会, 1997)。

## まさき 4.7 真幸山津波

### 4.7.1 昭和40(1965)年7月3日の土石流 <事例 No.49>

昭和40年(1965)の梅雨末期にあたる、6月29日から7月7日までの宮崎県下の降水量は、九州山地で600~700mm(特にえびのでは1152mm)、山間部400~600mm、平野部200~400mm、県南部200~300mmに達しました(宮崎地方気象台,1967)。

この大雨で、えびの市真幸字内堅では、7月3日22時10分頃、肥薩線真幸駅の西側約2kmの山腹から、白川(川内川支流)に沿って黄土が大量に流れ出し、真幸黄土工場の建物4棟、合計99m<sup>2</sup>を押し流す土石流が発生しました。その後も小規模な土石流が発生して、計2.5万m<sup>3</sup>の土砂が流失し、田畑80aが埋没しました(宮崎地方気象台,1967)。黄土とは、この付近に堆積する風化シラスです。

### 4.7.2 昭和47(1972)年7月6日の土石流 <事例 No.57>

昭和47(1972)年7月3日から6日にかけて、黄海から日本海北部に進んだ前線を伴った低気圧に向かって暖湿気流が流れ込んだため、九州と四国で雷を伴った局地的な大雨が降りました(気象庁ウェブサイト)。霧島山周辺も集中豪雨に見舞われ、総降水量は500mm以上を観測しました。さらにえびの市の熊本県境付近では総降水量が600mm以上に達しました(えびの市郷土史編纂委員会,1994)。

7月6日、えびの市真幸字内堅の肥薩線真幸駅の裏山が、8合目付近(海拔500~600m)で地すべり性崩壊を起こしたため、山津波が発生しました(えびの市郷土史編纂委員会,1994)。

山津波は6日14時15分から5回に分かれて発生し、高さ350m、幅280mにわたって山地が崩壊しました。30万m<sup>3</sup>に及ぶ土砂が、肥薩線を切断して白川沿いに1.5kmにわたり流出しました。この災害で住家28戸、非住家29戸が流失し、4名の方が亡くなりました(えびの市郷土史編纂委員会,1994)。しかし、その他多くの地区住民は、昭和40(1965)年の土石流の教訓を踏まえ、発生直前に避難して難を逃れたということです(地元住民の話)。さらに、山腹崩壊が起こる直前に杉・檜林の異常な揺れに気づいた集落の古老が「山津波が来る」と言って、集落の人々をいち早く高台に避難させたからである、とも言われています(藤本,2003)。



1972年撮影



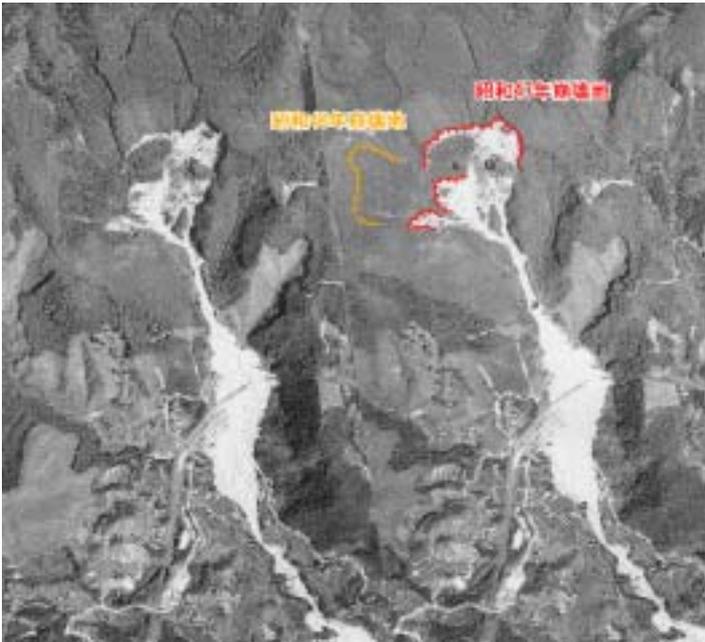
1998年撮影

“山津波記念石”は、当時の真幸駅長が、スイッチバック線ホームに取り残されていた推定重量約8トンの岩石を「災害記念」として柵と説明板を設置しました(写真上)。しかし、その後、真幸駅が無人駅となってからは手入れもされず、貴重な“災害遺産”は人々の意識に上らない状態になっていました(写真下)。

本冊子監修者の藤本廣氏は予めから広く“災害文化”伝承の重要性を説かれていました。「この記念石も、過去の災害を伝える貴重な資料である」とされた氏の意見に賛同した、県小林土木事務所が、“山津波記念石”の復元を実施しました(右頁 写真4.10)。現在はえびの市が維持・管理を行っています。このような経緯を経て、“山津波記念石”は約30年前の様に再びこの地域の“災害文化財”として日の目を見えています(藤本,2003)。

写真出典 - 藤本(2003)

重複して撮影された 2 枚の空中写真を真上から見ると画像が浮き出して、立体的に見ることができます。



中央の崩壊は、過去何回か繰り返された崩壊によって形成されたすり鉢状の凹地の中に発生したものです。昭和 47 年の崩壊地を包むすり鉢状の凹地西端部は、昭和 40 年に崩壊しました(大石,1985)。

この付近の地質は第三紀火砕岩からなり、粘土化の進んだ不透水性の溶岩～火砕岩類の上に、砕けやすい崩積性の溶岩～火砕岩類が分布しています(大石,1985)。

写真 4.7 えびの市真幸の山麓緩斜面に発生した崩壊と土石流  
(大石,1985)



写真 4.8 倒壊・流失した家屋  
(えびの市所蔵)



写真 4.9 崩壊地と流出土砂  
(えびの市所蔵)



昭和 47 年 7 月 6 日午後 1 時 45 分頃山津波が発生、約 30 万立方メートルの土砂が流出した。  
この岩塊は当時の山津波で流れ出たものを現地でそのまま山津波記念石として保存するものである。  
尚、この岩塊は重さ約 8 トンである。

昭和 47 年 8 月 真幸駅長

写真 4.10 山津波記念石(2004 年撮影)

## 4.8 昭和 57 年台風 11 号災害 昭和 57(1982)年 8 月 12~13 日

<事例 No.65-1 ~ No.65-4>



昭和 57(1982)年 8 月 6 日に発生した台風 11 号は、12~13 日にかけて東シナ海を北上して 13 日に黄海に進みました。宮崎県内に南東の非常に湿った空気が流れ込んだため、大気が不安定な状態になり、県中部から北部の山沿いで豪雨となりました(宮崎県建設技術会,1989)。

県内で死者 7 名、負傷者 3 名、家屋流失・全半壊 39 戸、床上浸水 50 戸、床下浸水 276 戸等、被害額 171 億 8500 万円の大きな被害が出ました(宮崎地方気象台,1983)。

図 4.11 降水量分布図  
(単位:mm,8月12日~13日)  
(県土木部河川課,1983)

中小屋 529mm  
高千穂・見立・大中尾・神門・  
諸塚・矢筈岳・西米良・西都・  
本庄 200mm 以上  
(宮崎県建設技術会,1989)



写真 4.11 西都市讓葉の山崩れ

西都市讓葉では、幅約 150m、高さ約 200m、崩落土砂 100 万 $m^3$ の山崩れが発生しました。国道 219 号線が決壊し、崩落土砂は一時、一ツ瀬川を完全に堰き止めました。このほか西都市では、大字穂北字平原と中尾で山崩れが発生して、それぞれ 1 名が亡くなりました。日之影町では、七折地区と宮水地区で山崩れが発生して、3 名が死亡しました(県土木部河川課,1983)。



写真 4.12 日之影町宮水の山崩れ



写真 4.13 西都市中尾の山崩れ  
(宮崎日日新聞社)

## 4.9 平成5年豪雨・台風災害 平成5(1993)年7月～10月

### 4.9.1 平成5(1993)年7月31日～8月2日の大雨 <事例 No.77-1・No.77-2>

高崎町大牟田字切藤では、8月1日17時に幅がそれぞれ40m、108m、高さ各30m以上の斜面2ヶ所で崩壊が発生しました。家屋が全半壊の被害を受け、2人が生き埋めとなり、内1人が死亡しました。当時高崎町周辺では、連続雨量246mm、最大時間雨量50mmを観測していました(県砂防課・道路保全課・河川課,1994)。

高千穂町河内字栃屋では、8月2日7時に幅31m、高さ29mの斜面崩壊が発生し家屋が流失しました。このため、3人が生き埋めとなり、内1人が死亡しました。当時高千穂町では、連続雨量138mm、最大時間雨量62mmを観測していました(県砂防課・道路保全課・河川課,1994)。



写真 4.14 高千穂町河内字栃屋の斜面崩壊

平成5(1993)年7月31日から8月2日にかけて、西日本に停滞する前線上を低気圧が東進したため、大気の状態が不安定となり、県下全域で豪雨となりました。

県内で死傷者9名、家屋全半壊22戸、一部破損20戸、浸水2284戸等、被害総額312億9千万円の大被害となりました(県砂防課・道路保全課・河川課,1994)。

### 4.9.2 平成5(1993)年8月10日の台風7号 <事例 No.78>

北方町では、子後曾木で10日4時、幅28m、高さ24mの斜面が崩壊しました。この崩壊で土砂が家屋に流入して、死者1名が出ました。当時北方町では、連続雨量276mm、最大時間雨量59mmを観測していました(県砂防課・道路保全課・河川課,1994)。

平成5(1993)年8月9日から10日にかけて、台風7号が九州の西海上を北上したため、紀伊半島から九州までの広い範囲で大雨となりました。

県内で死傷者16名、家屋全半壊30戸、一部破損132戸、浸水1447戸等、被害総額330億4千万円の大きな被害が出ました。

#### 4.9.3 平成 5(1993)年 9 月 3 日の台風 13 号 <事例 No.79-1 ~ No.79-3>

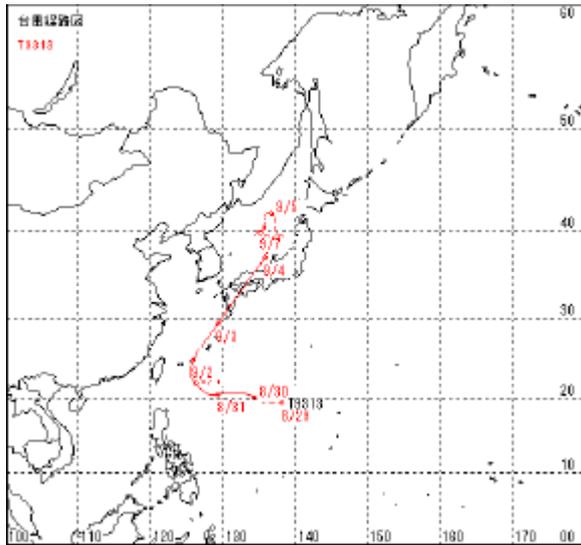


図 4.12 台風 13 号経路図  
(気象庁ウェブサイト)

気象庁によれば、平成 5(1993)年 8 月 31 日、沖の鳥島西方海上で発生した台風 13 号は、9 月 2 日に宮古島付近を通過後、東シナ海を発達しながら北東進し、3 日 16 時前非常に強い勢力のまま薩摩半島南部に上陸しました。その後、九州南部を通過して、23 時半頃、愛媛県八幡浜市付近に再上陸して、4 日 01 時半頃には広島県福山市付近に再上陸しました。その後中国地方を横断して山陰沖に進みました。全国で死者・行方不明者 48 名、負傷者 396 名、住家全壊 336 戸、半壊 1448 戸、床上浸水 3770 戸等の大被害を受けました。

県内で死傷者 145 名、家屋全半壊 385 戸、一部破損 32,560 戸、浸水 499 戸等、被害総額 451 億 2 千万円の被害が出ました。



見立：総降水量(2~4 日)576mm、  
宮崎：最大瞬間風速 SE57.9m/s  
都城：E46.7m/s

図 4.13 期間降水量図(単位:mm,9 月 1 日~5 日)  
(気象庁ウェブサイト)



小林市では、細野大王・豊原地区で土石流が発生して、1 名が死亡しました(小林市史編纂委員会,2000)。高千穂町では、徳別当地区で斜面崩壊によって家屋が損壊しました。また、日之影町では、根原川で土石流が発生しました(県土木部砂防課,2004)。

写真 4.15 高千穂町徳別当地区の災害



写真 4.16 日之影町根原川の土石流災害

### 4.10 平成 16 年台風災害 平成 16(2004)年 8 月～10 月



図 4.14 台風 16 号,18 号,23 号経路図 (福岡管区気象台資料より作成)

平成16年は年間で29個(平年26.7個)の台風が発生し、そのうち10個(同2.6個)が日本列島に上陸し、19個(同10.8個)が接近しました。このため、日本各地で大雨や暴風による大きな被害が発生しました。特に台風23号は、全国で死者82名、行方不明者8名の甚大な被害を出し、台風の人的被害では過去10年間で最悪の規模となりました。

本県では、主に台風16号、18号、23号の接近により、県内各地に多数の被害が出ました。この年には年間を通して、土石流21ヶ所、崖崩れ64ヶ所、地すべり2ヶ所の合計87ヶ所で、土砂災害が発生しました。

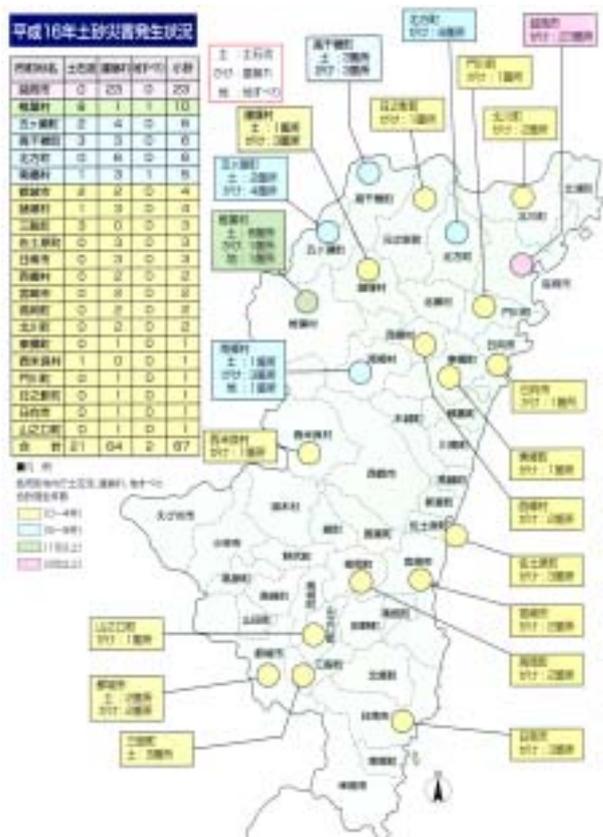


図 4.15 平成 16 年土砂災害発生状況図



写真 4.17 延岡市天下町の崖崩れ (台風 23 号)



写真 4.18 東郷町本村の崖崩れ (台風 23 号)

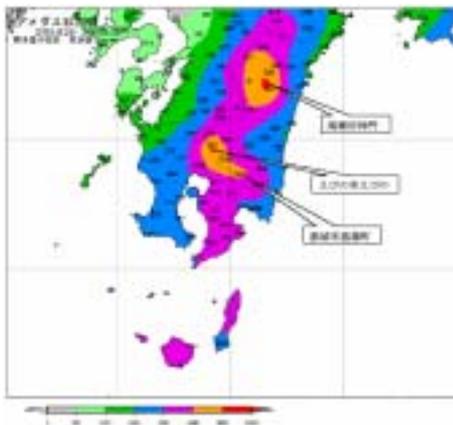


写真 4.19 椎葉村鹿野遊の土石流 (台風 16 号)



写真 4.20 不通となった国道 503 号 (諸塚村・台風 18 号)

#### 4.10.1 平成 16(2004)年 8 月 28～30 日の台風 16 号 <事例 No.83-1・No.83-2>



気象庁によれば、平成 16(2004)年 8 月 19 日 21 時、マーシャル諸島付近で発生した台風 16 号は、23 日にサイパン島の西で、大型で猛烈な強さの台風になりました。30 日 09 時半頃、鹿児島県串木野市付近に大型で強い勢力で上陸し、九州を縦断しました。

県内で死者 2 名、家屋全半壊 9 戸、一部破損 68 戸、床上床下浸水被害 239 戸の住宅被害が発生しました。

図 4.16 台風 16 号総降水量分布図  
(2004.8.28～30)  
(宮崎地方気象台ウェブサイト)

えびの 821mm 神門 756mm  
 菖蒲原 543mm 鞍岡 527mm  
 諸 塚 526mm 深瀬 446mm  
 (宮崎地方気象台データ)



8 月 30 日、椎葉村への交通路が崖崩れなどによって途絶され、一時村は孤立状態となりました。また、日之影町西日之影では崖崩れが発生して、家屋 1 戸が半壊しました。県では、高岡町と椎葉村に災害救助法の適用を決定しました。

図 4.17 椎葉村の被害を伝える新聞記事  
(宮崎日日新聞)



写真 4.21 椎葉村赤木谷川の被害

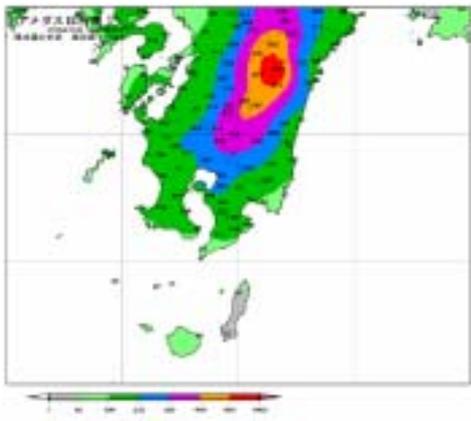


写真 4.22 椎葉村湯田の元谷川の土石流災害



写真 4.23 椎葉村内の八重川の被災状況

#### 4.10.2 平成 16(2004)年 9 月 4～7 日の台風 18 号 <事例 No.84-1～84-3>



気象庁によれば、平成 16(2004)年 8 月 28 日 09 時、マーシャル諸島近海で発生した台風 18 号は、9 月 5 日に大型の非常に強い勢力で沖縄本島を通過しました。その後、東シナ海を北上して進路を北東に変え、7 日 09 時半頃、長崎市付近に上陸して九州北部を横断しました。

県内で重軽傷者 14 名、家屋全半壊 9 戸、一部破損 22 戸、床上床下浸水 2 戸の住宅被害が発生しました。

諸 塚 905mm 神門 573mm  
西米良 549mm 見立 537mm  
高千穂 502mm  
(宮崎地方気象台データ)

図 4.18 台風 18 号総降水量分布図  
(2004.9.4～7)  
(宮崎地方気象台ウェブサイト)



写真 4.24 高岡町南城寺地区の崖崩れ

8 月の台風 16 号で幹線道路が寸断され孤立した椎葉村では、片側通行が始まっていた国道が、通行規制される一方で、林道などの迂回路も土砂崩落で通行できなくなり、再び孤立状態になりました。また、西米良村や高岡町では土石流や崖崩れが発生し、人家の一部破損を含む半壊 3 戸などの住宅被害が出ました。

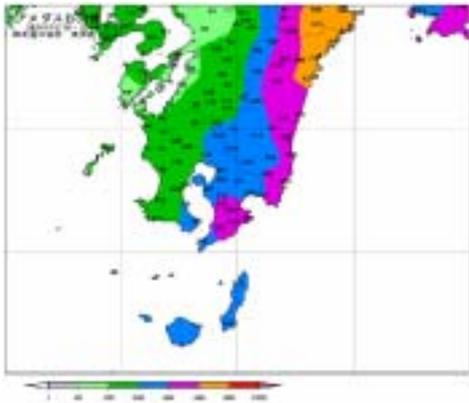


写真 4.25 西米良村山瀬川の山崩れ



写真 4.26 西米良村 村道山瀬線(旧国道 219 号)決壊現場

### 4.10.3 平成 16(2004)年 10 月 18～20 日の台風 23 号 <事例 No.85-1～85-3>



気象庁によれば、平成 16(2004)年 10 月 13 日に、マリアナ諸島の西の海上で発生した台風 23 号は、18 日 09 時に超大型で強い台風に発達しました。19 日には沖縄本島や奄美諸島に沿うように北上し、種子島の東海上を通過して、20 日 13 時頃、高知県土佐清水市付近に上陸しました。

県内で死者 2 名、家屋全半壊 6 戸、一部破損 15 戸、床上床下浸水 1028 戸の住宅被害が発生しました(消防庁データ)。

図 4.19 台風 23 号総降水量分布図  
(2004.10.18～20)  
(宮崎地方気象台ウェブサイト)

神門 469mm えびの 443mm  
延岡 439mm 日向 426mm  
(宮崎地方気象台データ)

台風 23 号による土砂災害は、延岡市を中心とした、県北部地域に集中して発生しました。また、台風は県東部を通過したため、人家が密集する平野部を中心に大雨となりました。延岡市では 23 箇所で崖崩れが発生して、人家が被害を受けました。

北川町では、北川が増水して家屋の床上床下浸水被害がありました。また、同町長井地区では土砂崩れが発生して、国道 10 号線が幅約 30m に渡って塞がれたため、町は一時孤立状態に陥りました。日南市富士では、20 日午後 1 時頃、市道(旧国道 220 号線)脇の斜面(サボテンハーブ園の南約 300m 地点)で、幅 350m、高さ 20～60m の地すべりが発生し、道路が約 200m にわたって海岸護岸もろとも決壊しました。この地すべりによって、サボテンハーブ園前を通る市道(全長約 4km)のうち、南側約 2km が通行止めになりました。

なお、平成 17 年(2005)の台風 14 号の際にも再び崩壊が発生しました(61 ページ参照)。



写真 4.27 日南市富士の地すべり全景(2004 年撮影)

### 4.11 平成 17 年台風 14 号災害 平成 17(2005)年 9 月 4~7 日

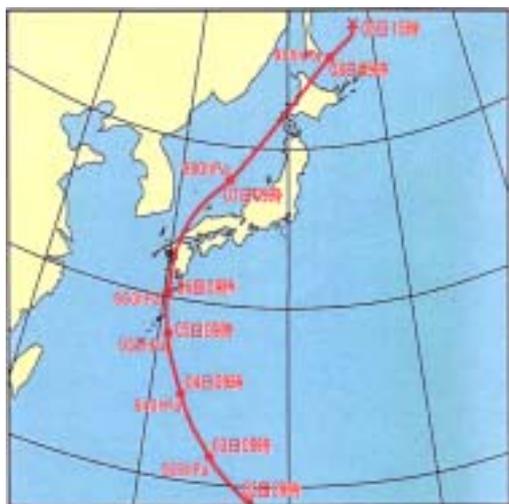


図 4.20 台風 14 号経路図

気象庁によれば、平成17(2005)年8月29日21時に、マリアナ諸島で発生した台風14号は、太平洋高気圧の縁に沿ってゆっくり西へ進みながら次第に勢力を強めていきました。9月5日夜に屋久島の西海上を通過、6日には九州の西岸に沿って北上し、14時過ぎに長崎県の諫早市付近に上陸しました。上陸時の中心付近の最大風速は35m/s、風速15m/s以上の強風域の半径は東側750km、西側700kmで「大型で強い」勢力でした。上陸後は勢力を弱めながら佐賀県や福岡県を横断して20時頃響灘へ抜け、加速しながら日本海を北東へ進みました。この台風は1時間に10~20kmと遅い速度で北上したため、九州の太平洋側では長時間激しい雨が降り続き、3日からの総雨量が多いところで1000mmを超える記録的な大雨となりました。

この台風により、県内では農林水産業や道路などの被害額が1000億円を超えるなど、戦後の台風災害としては最大級のものでした。また、山地部集落の孤立化や高齢者被害などの問題が浮き彫りにされました。

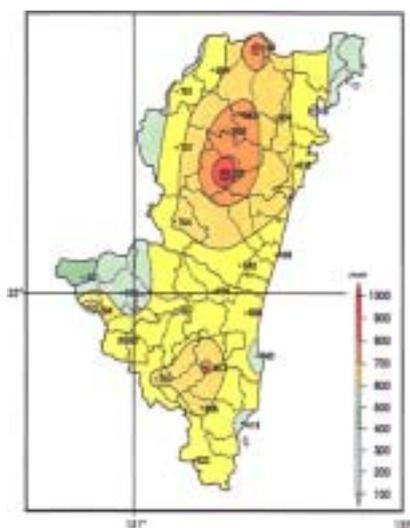


図 4.21 台風 14 号経路図  
(宮崎地方気象台資料)

#### <大雨の状況>

今回の大雨の特徴は、台風の勢力が大きかったために、東風による地形的な影響で雨の降り始めが早く、雨量が多くなったことと、台風本体の雨が重なり県内の広い範囲で記録的な大雨をもたらしたことでした。

本県では台風がまだ南大東島のはるか南東海上にあった3日の昼前から所々で雨が降り始め、4日明け方からはほぼ全域で雨となりました。東海上から断続的に流れ込む雨雲により、4日の日雨量は日向で194mm、鰐塚山で223mmを観測しました。台風本体の雨雲がかかり始めた5日22時頃から、台風が最も接近した6日の昼過ぎにかけて強い雨が降り続けました。神門観測所では、4日01時から6日24時までの総雨量1321mmを記録しました。

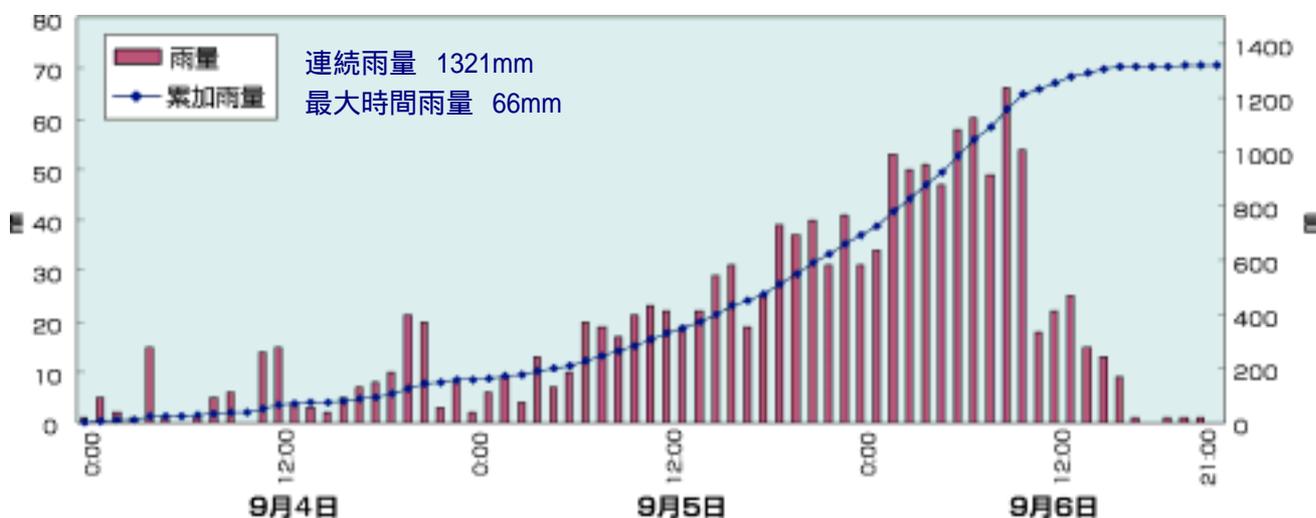


図 4.22 神門観測所雨量状況グラフ(2005.9.4~9.6)

表 4.3 アメダス総降水量(2005.9.4.01時~9.6.24時)  
(宮崎地方気象台資料)

地点名	総降水量 (mm)	地点名	総降水量 (mm)	地点名	総降水量 (mm)	地点名	総降水量 (mm)	地点名	総降水量 (mm)
神門	1321	中小屋	942	鞍岡	751	北方	600 <sup>1</sup>	延岡	509
えびの	1284	上椎葉	862	国富	698	池の尾	597	高鍋	483
見立	1184	深瀬	801	日向	669	霧島御池	568	古江	439
諸塚	986	都城	777	串間	618	西都	562 <sup>2</sup>	青島	439
鰐塚山	979	西米良	754	宮崎	607	高千穂	554	油津	415

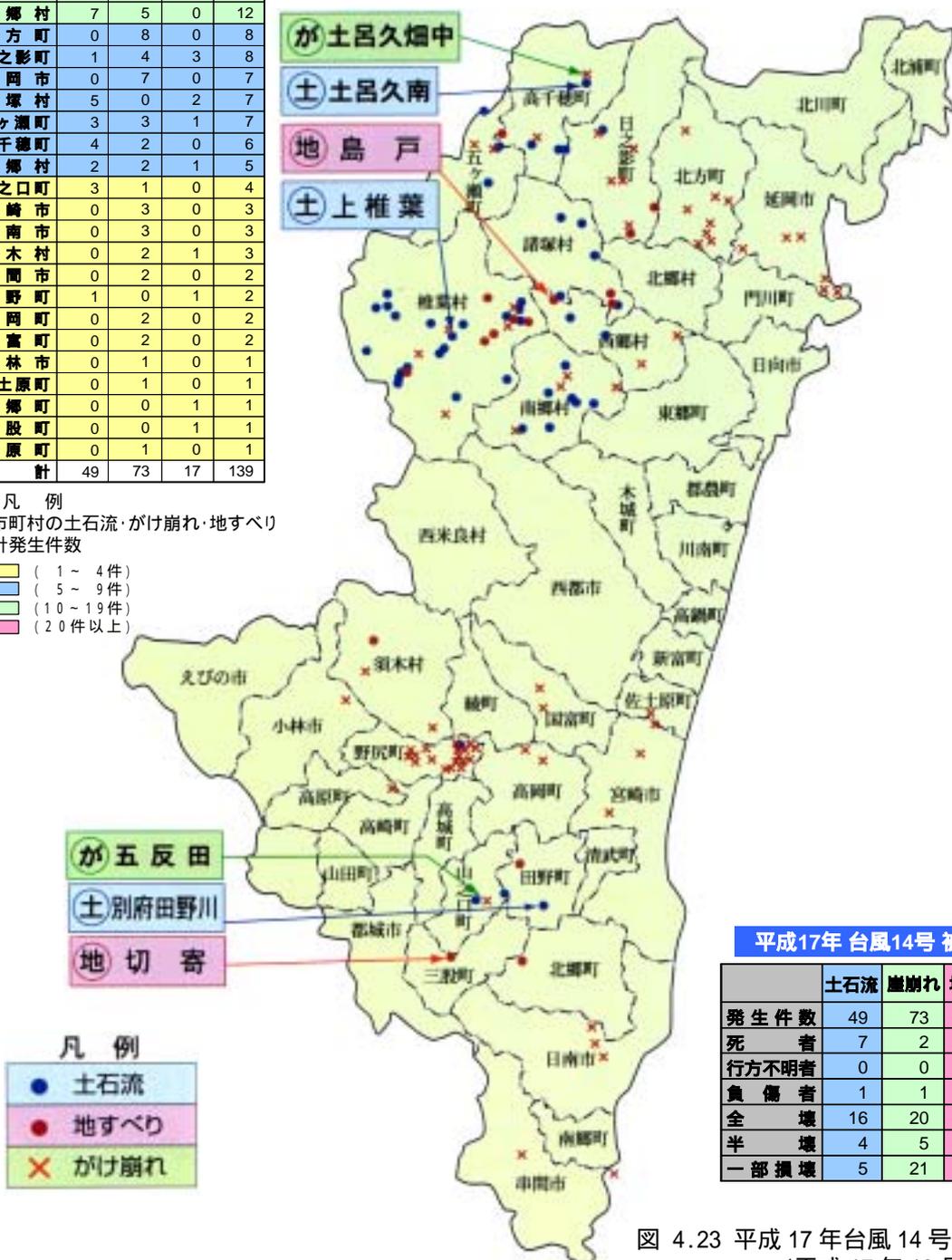
1 北方は障害のため9月6日07時までの観測値  
2 西都は障害のため9月6日08時までの観測値

平成17年 土砂災害発生件数

市町村名	土石流	崖崩れ	地滑り	小計
椎葉村	22	6	6	34
野尻町	1	18	0	19
南郷村	7	5	0	12
北方町	0	8	0	8
日之影町	1	4	3	8
延岡市	0	7	0	7
諸塚村	5	0	2	7
五ヶ瀬町	3	3	1	7
高千穂町	4	2	0	6
西郷村	2	2	1	5
山之口町	3	1	0	4
宮崎市	0	3	0	3
日南市	0	3	0	3
須木村	0	2	1	3
串間市	0	2	0	2
田野町	1	0	1	2
高岡町	0	2	0	2
国富町	0	2	0	2
小林市	0	1	0	1
佐土原町	0	1	0	1
北郷町	0	0	1	1
三股町	0	0	1	1
高原町	0	1	0	1
合計	49	73	17	139

凡例  
各市町村の土石流・崖崩れ・地すべり  
合計発生件数

- (1~4件)
- (5~9件)
- (10~19件)
- (20件以上)



平成17年 台風14号 被害状況

	土石流	崖崩れ	地滑り	合計
発生件数	49	73	17	139
死者	7	2	2	11
行方不明者	0	0	0	0
負傷者	1	1	0	2
全壊	16	20	1	37
半壊	4	5	0	9
一部損壊	5	21	1	27

図 4.23 平成17年台風14号被災箇所図  
(平成17年10月3日現在)

**高千穂町土呂久畑中** <事例 86-1>

高千穂町土呂久畑中で崖崩れが発生して、死者1名、負傷者1名、家屋全壊1戸の被害が出ました。



写真 4.28 高千穂町土呂久畑中の崖崩れ

**高千穂町土呂久南** <事例 86-2>

高千穂町土呂久南で土石流が発生して、死者4名、家屋全壊1戸の被害が出ました。



写真 4.29 高千穂町土呂久南の土石流

**日之影町神影上** <事例 86-3>

日之影町神影上で崖崩れが発生して、家屋全壊 8 戸、半壊 3 戸の被害が出ました。



写真 4.30 日之影町神影上の崖崩れ

**五ヶ瀬町室野** <事例 86-4>

五ヶ瀬町室野で崖崩れが発生して、家屋全壊 3 戸、半壊 1 戸の被害が出ました。



写真 4.31 五ヶ瀬町室野の崖崩れ

**椎葉村上椎葉** <事例 86-5>

椎葉村上椎葉では土石流が発生して、死者3名、家屋全壊7戸、半壊2戸の被害が出ました。村外に通じる道路は全て寸断され、電話などの通信網は使用不能に陥るなど、村は一時「陸の孤島」と化しました。



写真 4.32 椎葉村上椎葉の土石流

**西郷村島戸** <事例 86-6>

塚原ダムの下流 500m付近で地すべり崩壊が発生しました。崩壊土砂（320 万 $m^3$ 程度と推定）は耳川の河道を閉塞したため、一時約 350 万  $m^3$  が湛水しました。今回の崩壊と河道閉塞・決壊による人的被害はありませんでした。



写真 4.33 西郷村島戸の地すべり崩壊

## 田野町鰐塚山 <事例 86-9>

田野町鰐塚山周辺では、別府田野川、片井野川、境川、七瀬谷川で大規模崩壊が発生しました。全体の崩壊生産土量は 670 万 m<sup>3</sup> を超えると推定されています。今後の降雨により、流出土砂の氾濫が懸念されている田野町は、被害の想定される区域の住民に対し、危険性を周知するとともに、情報の収集や伝達が迅速にできるよう、警戒避難体制を強化しました。また、県は緊急時に住民が迅速に避難できるよう、ワイヤーセンサー等を設置して土砂移動を常時観測しています。

本県における最大級の土砂崩壊となった鰐塚山山系の土砂災害については、土砂移動現象の実態を把握し、適切な土砂処理方針を策定するため、「鰐塚山山系土砂災害対策検討委員会」を設置し、土砂災害対策を検討しました。

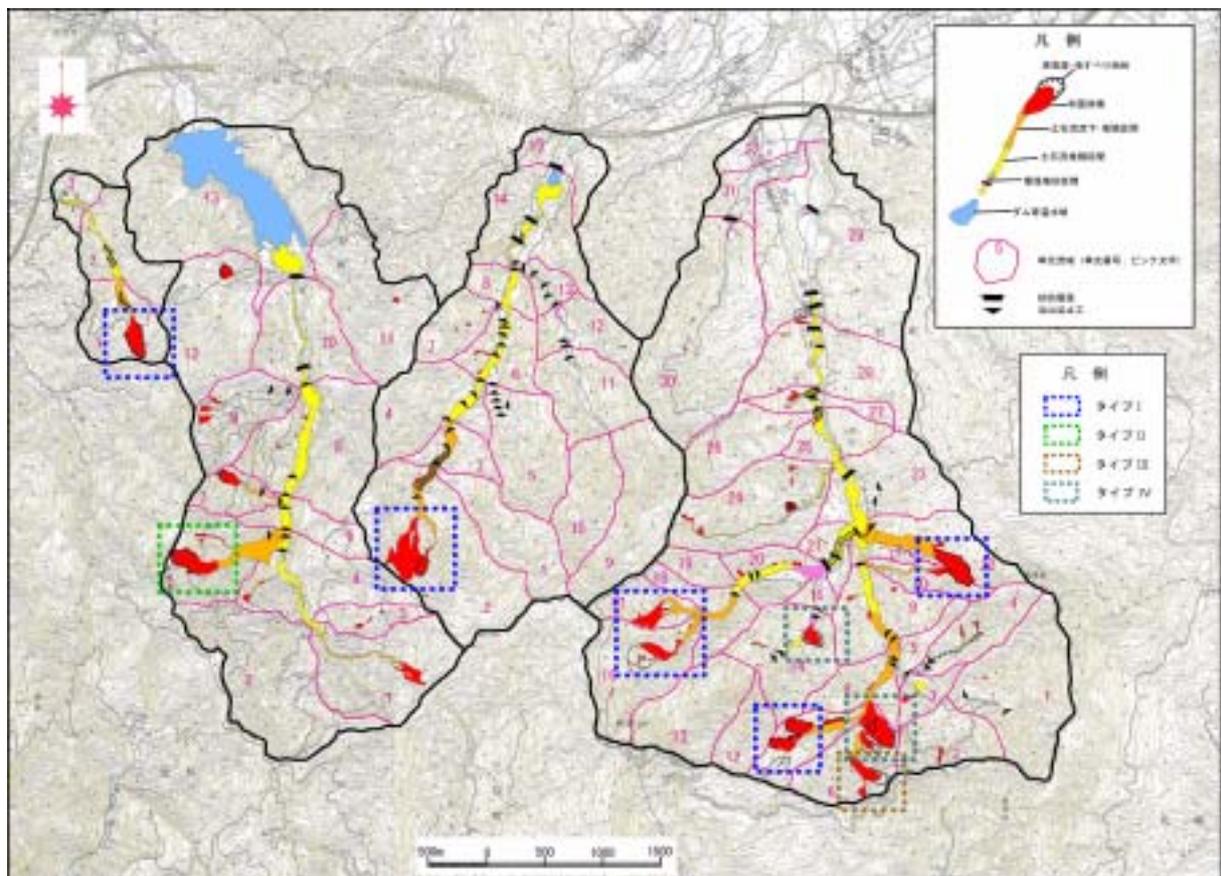


図-4.25 鰐塚山山系空中写真判読図及び大規模な崩壊の発生形態

### 崩壊タイプ分類（凡例）

- タイプⅠ：崩壊地末端部が崩壊し、その後頭部が滑落するタイプ
- タイプⅡ：崩壊地全体が高含水状態で一気に流動化するタイプ
- タイプⅢ：地すべり危険箇所内の土砂が流出するタイプ
- タイプⅣ：地すべりタイプ

別府田野川流域では、崩壊土砂量が380万 $\text{m}^3$ と推定され、土石流による堆積土砂で河床が上昇し、「わにつか溪谷いこいの広場」のバンガロー、テニスコート等のキャンプ施設を飲み込むという甚大な被害が発生しました。



写真 4.36 別府田野川上流の崩壊状況

境川では、上流部の崩壊土砂が流出し、下流にある灌漑用ダム（天神ダム）にまで達しました。



写真 4.37 境川上流部崩壊状況

### 山之口町五反田 <事例 86-7>

山之口町五反田で裏山が崩れて1名が亡くなりました。町内各地で土砂崩れ、道路の冠水、家屋破損等の被害が出ました。また、JR 日豊線青井岳駅構内で路盤が流出して不通となったほか、宮崎自動車道の宮崎 - 都城間が不通となるなど、一時交通が寸断されました。



写真 4.34 山之口町五反田の崖崩れ

### 三股町切寄 <事例 86-8>

三股町切寄の住宅裏山で高さ 15m、幅 30m の地すべりが発生して、死者 2 名、家屋全壊 1 戸の被害が出ました。この箇所には、急傾斜地崩壊防止施設が設置されていましたが、地すべりにより大きな力が加わり、擁壁が破壊されました。

対策施設は全ての異常気象に対して万全ではないため、早めの避難が必要です。



写真 4.35 三股町切寄の地すべり

## コラム 自然の恵みと観光

本県は太平洋側を暖流が流れ、1年を通して温暖な気候であるため、古くから観光産業が盛んです。また、天孫降臨の地とされ、神話や伝説が数多く残る地域であり、県内各地に夜神楽をはじめとする「神々の国」にふさわしい民俗芸能や、祭りが伝承されています。さらに至る所に古墳群が散在していて、遠く古代を偲ばせてくれます。

わが国最初の国立公園として指定された霧島・屋久国立公園や高千穂峡などは、火山活動とその後の雨水や河川の侵食によって創り出された景勝地です。霧島火山帯に位置するえびの高原は、九州最高地の温泉郷として発展するなど火山の恩恵を受けています。

太平洋側には日豊海岸国定公園や日南海岸国定公園の美しい海岸線が広がっています。青島周辺には鬼の洗濯板とも呼ばれる波状岩が広がり、日向灘の波の荒々しさを感じさせてくれます。

本県では、温暖な気候、恵まれた自然、交通アクセス(空路)、充実したスポーツ施設、宿泊施設など、恵まれた環境を生かして従来からプロ野球チームのキャンプやスポーツイベントの誘致・育成を積極的に進めてきました。近年では、プロ野球やプロサッカーチームの参加数ともに順調に増加しています。

